慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書かれなかった「続・プロシア王フリードリヒ伝」：イギリス18世紀における啓蒙君主の表象
Sub Title	Preußens aufgeklärter Monarch in der englischen Memoirenliteratur im 18. Jahrhundert : Die ungeschriebene Fortsetzung der ,,Memoirs of the King" von Samuel Johnson
Author	原田, 範行(Harada, Noriyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.2 (2006. 12) ,p.138- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Essays in Honour of Profrssor Takahiro Shibata
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910002-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書かれなかった「続・プロシア王フリードリヒ伝」
——イギリス18世紀における啓蒙君主の表象——

Preußens aufgeklärter Monarch in der englischen Memoirenliteratur im 18. Jahrhundert
—Die ungeschriebene Fortsetzung der „Memoirs of the King" von Samuel Johnson—

原田範行
Noriyuki Harada

I. イギリス18世紀のドイツ的表象とジョンソンの「プロシア王フリードリヒ伝」[1]

1726年10月28日、『遠方諸国旅行記』と題する書物がロンドンで刊行された。作者は「レミュエル・ガリヴァー」。今日一般に『ガリヴァー旅行記』として知られるジョナサン・スウィフトの傑作である。その第1部「リリパット国紀行」は、ガリヴァーの船が難破し、彼がいわゆる「小人の国」リリパットの岸辺に打ち上げられて九死に一生を得るところから始まる。巨大な「人間山」に驚愕したリリパットの人々は、彼をひもで縛って台車に載せ、馬1,500頭あまりに引かせて宮殿へ運ぶ。ガリ

[1] 人名・地名表記は英独に差があるが、本論では、それぞれの文脈や慣用に従い、必ずしも一貫していないことをお許しいただきたい。

ヴァーはそこで皇帝に謁見することになるのだが、貴顕の士と共に見物人の前に姿を見せた皇帝を、彼は次のように描写する。

> 陛下は、他の宮廷人よりもちょうど私の爪の幅くらい背が高く、それだけでも彼を目にする者に畏怖の心を起こさせる。体つきは屈強で男性的、唇はオーストリア風で鼻はアーチ型、顔色はオリーヴ色。姿勢は正しく体躯は均整が取れ、その動きは優美にして振る舞いは堂々としている。年齢はちょうど若い盛りを過ぎた28歳9ヶ月で、この国を治めて7年余り。大きな幸福と多くの栄光をもたらしている。[2]

未だリリパットの言葉を解さぬガリヴァーが、皇帝の年齢を「28歳9ヶ月」とし、その治世が「7年余り」と記述できるはずはないのだが、しかし読者は、既に諷刺作家スウィフトの術中にはまり、この皇帝にある現実を見出そうとする。この皇帝はいったい何者か。

少し整理してみよう。「リリパット国紀行」の時代設定は1699年である。当時のイギリス国王は、名誉革命によってオランダから迎えられたウィリアム3世。彼は侵略者とさえ評される不人気な国王で、その「アーチ型」の鼻は有名であった。他方、スウィフトが執筆を始めたと推定される1721年にイギリス国王であったのは、ドイツ・ハノーヴァー選帝侯から迎えられたジョージ1世。「7年余り」という記述は、1714年に始まる彼の治世にぴたりと一致する。もっとも、ハノーヴァー出身のジョージ1世は「オーストリア風」でもなければ背も高くなく、とても「屈強」な体つきとは言えなかったらしい。だが、ハノーヴァー家の君主に反対し、名誉革命で放逐されたジェイムズ2世の系譜を引くステュアー

---

[2] Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, ed. Claude Rawson (Oxford: Oxford UP, 2005), p. 25 より拙訳による引用。なお、同書に収められた Ian Higgins の注釈も参照。

ト家を支持したジャコバイトと呼ばれる一派は、ジョージ1世がオーストリア・ハプスブルク家寄りの隠れカトリックであることを疑い、イギリス国教会の宗主として不適格であることを喧伝していた。スウィフトが、時の国王への直接的な揶揄を避けつつ、リリパット国皇帝の人物造型にこの主張を採り入れていたとすれば、それはウィリアム3世とジョージ1世という外来の、いわば侵略者としての君主の相貌を見事に集約したことになる。「盛りを過ぎた」という描写も、執筆当時、61歳であったジョージ1世の姿を想起させる。

18世紀イギリス文学において、このようなドイツ的表象の性格が論じられることは、実は稀である。例外的に多くの研究が存在するのは、イギリスで発達した小説や定期刊行物のドイツにおける受容の問題と、18世紀末から19世紀にかけて、イギリス・ロマン派が受けたドイツからの思想的影響に関するものに限られると言ってよい。[3] 実際、世紀の初頭から後半に至る、いわゆる「オーガスタン」と称される時期に執筆された主要な作品を見ても、確かにドイツ的表象は少ない。ドーヴァー海峡を隔てた隣国フランスや大陸旅行の目的地イタリアに比べ格段の開きがある。各地の植民地の場合とはまた異なる一種の地理的距離感や社会的違和感がその底流にあったことは否めまい。先の『ガリヴァー旅行記』第1部の記述は、「遠方」の国のものとはいえ、やはり例外と言うべきであろう。しかしながら18世紀の英独関係は、まさにこのリリパット国皇帝の描写が象徴的に示すように、イギリス国王の出自の問題をはじめ、そ

3 この問題については、Graham Jefcoate, "German Printing and Bookselling in Eighteenth-Century London: Evidence and Interpretation," *Foreign-Language Printing in London 1500-1900*, ed. Barry Taylor (London: British Library, 2002), pp. 1-36、Bayard Q. Morgan, *A Critical Bibliography of German Literature in English Translation, 1481-1927* (California: Stanford UP, 1938)、Patrick O'Neill, *German Literature in English Translation* (Tronto: U of Tronto P, 1981)、Lawrence M. Price, *English Literature in Germany* (Berkeley: U of California P, 1953)、V. Stockley, *German Literature as Known in England, 1750-1830* (London: Routledge, 1929) などを参照。

れに淵源するオーストリア継承戦争や七年戦争、さらにフランス革命後の君侯同盟に至るまで、多様な緊張関係の中で推移したのであり、その表象を看過するのは、当時のイギリス文学の実相を捉えそこなう危険すらないわけではない。

本論は、そうした欠を補う試みの一つとして、イギリス18世紀の文豪サミュエル・ジョンソンが記した「プロシア王フリードリヒ伝」(1756年、以下「伝」と略記)を手がかりに、その周囲の言説や人物から、当時のイギリスにおけるドイツ的表象の特質の一端を考察しようとするものである。むろん、プロイセンの啓蒙君主として後に大王と呼ばれたフリードリヒの事績のみをもってイギリス18世紀におけるドイツ的表象を包括的に捉えるのは無理があるし、またジョンソンのこの「伝」にしても、その著作の中で大きな比重を占めるわけではなく、本格的な研究も従来ほとんどなされてはいない。しかしながら、ヨーロッパ諸国のみならずその植民地をも巻き込んだ七年戦争開戦の年に発表され、ジョンソンの執筆した多くの伝記の中でも唯一、君主を対象にした作品であることは十分に考慮されてしかるべきであろう。また、この「伝」が1745年の記述をもって途絶していることも、検討すべき課題である。本論において、「伝」を手始めにイギリス18世紀におけるドイツ的表象を考察する手がかりを得ようとする所以はここにある。[4]

---

[4] 既にNiall MacKenzieが言及しているが、イライザ・ヘイウッドはその『淑女への書簡』(1749-50)において、フリードリヒの宮廷にチャールズ・エドワード・ステュアート(いわゆる若僭王)の肖像画が存在していたことを示唆している。このことから、当時のドイツ的表象、特にフリードリヒに関わる記述にイギリスのジャコバイト問題を関連づける必要もあるが、この問題は本論の枠を大きく越えるため、別に論考を準備したい。Niall MacKenzie, "Eliza Haywood in a 'Scrutinising Age'," *The Age of Johnson* 16 (New York: AMS, 2005), pp. 177-97を参照。

Ⅱ.「伝」の執筆経緯と途絶の謎

ジョンソンの「伝」は、1756年11月から翌57年1月にかけて、ロンドンで刊行されていた『リテラリー・マガジーン』の第7号から第9号に、3回に分けて連載された。[5] 同誌は、ジョンソンを主筆とする形で1756年5月に刊行された月刊誌である。

「伝」の執筆経緯には謎が多い。そもそも、なぜジョンソンは、この時期に、このような伝記を著したのか、という問題がある。周知の通り、彼は前年の1755年、画期的な『英語辞典』を刊行した。フランスのアカデミーが編纂した『仏語辞典』とは異なり、彼はこの大事業を、8年余りの歳月を費やし、ほとんど独力で完成させたのである。その解放感が、彼を雑誌編集に向かわせたであろうことは、既に1750年、辞典編纂の苦痛に対する一種の捌け口として雑誌『ラムブラー』を手がけたことからも容易に推察される。1756年11月という時期にも必然性はある。ヨーロッパならびに植民地における覇権を狙っていたイギリスが、プロイセンのフリードリヒと同盟して七年戦争に突入した、その直後であるからだ。そこまでは分かりやすい。だが、ジョンソンはこの戦争に強く反対しており、戦争を遂行してイギリスに大勝利をもたらした首相ウィリアム・ピットに嫌悪感すら抱いていた。したがって、ジョンソンの立場からすれば、「伝」におけるフリードリヒの描写が否定的になっても不思議はないのだが、後述するように、そうではないのである。もちろん、戦争反対の彼が国威発揚を図り、敢えて君主の伝記執筆に乗り出したとは考えにくい。

---

5 掲載当時の原タイトルは、"Memoirs of the King of Prussia"（第7号）、"The Life of the King Prussia continued"(第8号)、"Life of the King of Prussia . . . Concluded"（第9号）。本論における「伝」の引用は、*The Works of Samuel Johnson, LL.D* の第6巻(Oxford, 1825), pp. 435-74 からの拙訳により、以下、原文頁のみを本文中に注記する。なおこの「伝」は、1958年以降刊行が継続しているイェール版ジョンソン全集には未収録である。

何を素材にしたのか、という点も謎である。前述の通り、1756年というタイミングは、確かに雑誌の売り上げには効果的であった。こういう場合にジョンソンが、いささか売文的な小伝を量産していたことは、彼の多くの初期作品群の執筆経緯にも見られる通りである。その際彼は、何らかのより詳細な記録を参照し、これを圧縮しつつ彼一流の筆致を加えることを常とした。だが「伝」には、それに相当するものがないのである。もちろん、各種定期刊行物にはフリードリヒに関する短信がかなり掲載されていたから、それらを収集してまとめることは可能である。彼が無名文士であった頃から深く関わったエドワード・ケイヴ編集の『ジェントルマンズ・マガジーン』にも、1731年の創刊当初から、フリードリヒに関する短信は継続的に見られる。しかしながらその場合、小伝発表の適切な時期を見計らって彼に必要な資料を提供するのは、通常、ケイヴのような編集者であって、ジョンソンの才覚によるものではなかった。それならば別に、一本としてまとまった英語もしくはフランス語による何らかのフリードリヒの伝記をジョンソンが手元に置いていたかというと、その形跡もない。少なくとも英語文献に関する限り、ジョンソンの「伝」が、その後のフリードリヒの伝記的記述の基礎になるのであって、その逆ではないのである。こうした事情は、ジョンソンの多くの伝記作品の中でもかなり珍しい。[6]

なかでも最大の謎は、「伝」が1745年の記述をもって途絶していることだ。発表のタイミングにせよ、雑誌記事以外に有力な参照文献を欠くという事情にせよ、「伝」のこの不思議な終わり方の謎を増幅するばかりである。七年戦争開戦と軌を一にして発表されたものであれば、当然、同時代の新しい記述が要請されるはずであるし、定期刊行物に見られるフリードリヒへの言及は、1745年以降の政治情勢の変化に応じて逆に増加していたからである。10年以上前に仕上げた原稿をそのまま利用したとも考えにくい。したがってこの途絶は、ジョンソンの執筆意図そのものにも関わる可能性が考えられるのである。

もっとも、雑誌記事を執筆するジョンソンは、常に、ある種の軽さを有していた。例えば先の『ラムブラー』創刊号に、彼はこう記している。「懸命に工夫を凝らしても敬意を払われるだけのものに仕上がらなければ、すぐ止めてしまえばよい。」[7]「伝」でも、その途絶を予告するかのような一節が、既に作品半ばに見られる。「この（プラグマティック・サンクションなどの）問題については、小伝で詳述することはできない。より時間と知識を有する別の著者に委ねよう。」（445）そうして彼は、

---

6 ジョンソンの「伝」の後、その影響下に発表された主なものは次の通りである。（フリードリヒは、一般に「フリードリヒ・ヴィルヘルム2世」もしくは「フリードリヒ大王」と呼ばれるが、書名に“Frederick III”とあるのは、彼の祖父、すなわち彼の父のフリードリヒ・ヴィルヘルム1世の父のフリードリヒをプロイセン王初代と数えていることによる。版本の中で出版地名表記のないものは全てロンドン刊であり、(6)と(7)が、ジョンソン作品としての「伝」の本格的な単行本出版である。）(1) *London Chronicle* 誌上に1757年5月に連載されたもの、(2) 匿名作者による *Memoirs of Frederick III. King of Prussia*（1757、「伝」からはかなりの変更がある）、(3) W. Salmon, *Memoirs of the Life and Glorious Actions of Frederick III. King of Prussia* (Nottingham, 1758、「伝」を巧みにリライトしたもの)、(4) Thomas Davies 編纂による *Miscellaneous and Fugitive Pieces* (1773-74) 所収のもの、(5) Joseph Towers, *Memoirs of the Life and Reign of Frederick the Third, King of Prussia* (1787、「伝」の筆致を残している)、(6) *Memoirs of the King of Prussia* (1787)、(7) *Memoirs of the King of Prussia* (Liverpool, 1790?)。1786年以後に再版が多いのは、同年、フリードリヒが亡くなったことによる。ジョンソン作品の版本に関しては、J. D. Fleeman, comp., *A Bibliography of the Works of Samuel Johnson* (Oxford: Clarendon, 2000) を、またジョンソンと『リテラリー・マガジーン』との関係については、Donald D. Eddy, *Samuel Johnson: Book Reviewer in* The Literary Magazine: or, Universal Review *1756-1758* (New York: Garland, 1979) を参照。18世紀イギリスにおけるフリードリヒ関係の伝記出版調査は、大英図書館を中心に行ったが、ジョンソンが何らかのフランス語による情報、特にフリードリヒと親交のあったヴォルテール関係文書を参照していた可能性はある。今後更に調査を進めたい。

7 *The Rambler*, ed. W. J. Bate and Albrecht B. Strauss, Yale Edition of the Works of Samuel Johnson 3 (New Haven: Yale UP, 1969), p. 8 より拙訳による引用。

「伝」を次のように締めくくるのだ。

> 君主の伝記にも、国の歴史を語るのと同じく、区切りがある。プロシア王の伝記はここで切り上げることにしよう。今や彼は、人間の偉大さの高みにあって、敵を法治し、ヨーロッパ諸国のあらゆる君主から賞賛を受けていたのである。(474)

いかにも気ままな結びではある。しかし、「伝」がジョンソン作品としては唯一、君主の伝記であること、しかもそれが外交問題の重要な転回点に執筆されたことなどを勘案すれば、その途絶の意味は、確かに謎の多いこの「伝」の性格そのものに関わる問題と言えよう。意図的な途絶であれば、それはフリードリヒや君主一般、あるいは当時のイギリス外交に対する異論とも考えられるからだ。彼はなぜ、「伝」の記述を途絶させたのであろうか。

Ⅲ. 人間フリードリヒと『人間の願望の空しさ』

「伝」に収められた主な内容は、フリードリヒの出生から父王との確執、ブラウンシュヴァイク・ベーヴェルン公の娘エリーザベトとの結婚、啓蒙思想への傾倒、そして即位後のシュレージエン侵攻と法典整備である。発表が1756年であり、しかも1745年段階の記述で終わっているため、ポーランド分割や君侯同盟はもちろん、七年戦争に至る1750年代前半の治世も描かれてはいない。したがって「伝」が対象としているのは、「大王」としての業績ではなく、即位までの紆余曲折と、即位直後のシュレージエン戦争に苦心する人間フリードリヒの姿であると言えよう。こうした特徴は、ジョンソンが、「伝」を除き、君主に関する伝記を手がけなかったという事情とも関係しているとみることができる。イギリス伝記文学の発達に寄与したと評される伝記論の中で、彼は次のように記しているからだ。[8]

王国の衰亡や帝国の革命の話は冷めた眼で読まれるものだ。帝国の悲劇といっても、それが一般の聴衆に喜ばれるのは、表現に装飾を凝らし荘厳な思想が込められている場合だけのことである。(中略) 伝記作者の務めは、非常に大きな業績や出来事を軽く扱い、むしろ内輪の私事に考察を及ぼして日常生活の詳細を描くことにある。[9]

実際、「伝」を掲載した『リテラリー・マガジーン』のような一般的読み物ではない、「表現に装飾を凝らし荘厳な思想」を込められるようなジャンルの作品であれば、ジョンソンは比較的自由に君主の事績に言及し、ドイツ的表象を用いた。韻文である。例えば、1749年に刊行された彼の代表的な詩『人間の願望の空しさ』に、次のような一節がある。

向こう見ずなバイエルン人が、不幸にも／皇帝の威勢の恐るべき頂点に登ろうとする（中略）だが、なんと短い支配であることか！美しきオーストリアが憂いに満ちた魅力を広げ／美しき女王は世界を手中に収める／山また山にのろしが上がり（中略）獰猛なクロアチア人、荒っぽいハンガリー人／そして破壊の息子たちが戦に群がってくる／威勢を前にして浴びせかけられる追従に功を焦った帝は／困惑し、自らの運命を悟る／敵はこれを嘲り、臣下はこれを難じ／怒りと汚辱にまみれてひそやかに逝く[10]

「向こう見ずなバイエルン人」とはカール7世、「美しきオーストリア」

8 英単語としての"biography"の初出は1683年と推定され、伝記文学の発達はイギリス18世紀文学の重要な特質の一つである。このことについては、拙稿「現代の出発点を確認する—英国18世紀文学の視点」『英語青年』(2005年2月号、研究社)、2-5頁を参照。

9 *The Rambler*, Yale Edition 3, p. 319より拙訳による引用。

はマリア・テレジア。「破壊の息子たち」が群がった「戦」とは、もちろんオーストリア継承戦争である。

当然のことながら、ジョンソンがこの韻文に描出した歴史のひとコマは、「美しきオーストリア」を賞賛するためでもなければ、この戦争の最中にシュレージエンに侵攻したフリードリヒを暗に称揚するためでもない。「浴びせかけられた追従」に踊ったカール7世の悲惨な最期を「装飾を凝らし」て語ることで、「人間の願望の空しさ」という「荘厳な思想」を、それが最も顕著に現れる「王国の衰亡」という形で示そうとしたものである。

「人間の願望の空しさ」という諦観を軸に、国王や皇帝の事績を強引なまでに人間一般の真理に引きずり下そうとするジョンソンのこうした反英雄観を、彼の文学の特質の一つと捉え、その観点から「伝」の途絶の謎を処理しようとする研究者もいる。先に引用した「伝」の最終部分を、ロバート・フォーケンフリックは次のように解釈する。

> 「切り上げる」(suspend) という語は、この伝記が後々継続するという考えを示すように思われるかも知れないが（中略）この一節は、人間の願望の空しさを意識する人々に向けて書かれたものではあるまいか。そういう読者であれば、時間の絶えざる進行の中にある人生が、語りとは違って中断できぬものであり、「人間の偉大さの高み」にあるフリードリヒの姿もまた借り物に過ぎないということが容易に理解されよう。[11]

---

[10] "The Vanity of Human Wishes" (ll. 241-54), *Poems*, ed. E. L. McAdam, Jr. with George Milne, Yale Edition 6 (New Haven: Yale UP, 1964), p. 103 より拙訳による引用。なお、後出の「ある教訓を示し、話を飾る」はスウェーデン王カール12世の悲劇を描いた同詩222行による。

[11] Robert Folkenflik, "Johnson's Heroes," *The English Hero 1660-1800*, ed. Folkenflik (Newark: U of Delaware P, 1982), p. 151 より拙訳による引用。

だから、絶頂期にあるフリードリヒも、すぐに「ある教訓を示し、話を飾る」だけの存在になるだろう考え、ジョンソンはフリードリヒの「伝」を放置したというわけである。

「伝」の途絶にある意味を見出そうとするこの解釈には、しかしながら、大きな問題点がある。「表現に装飾を凝らし荘厳な思想」を込めるべく書かれた韻文に示された諦観を、それとは別の主人公について、ジャンルも異なる定期刊行物に発表された「伝」にも共通して読み取ろうとしているからだ。先に引用した伝記論を読む限り、ジョンソンはジャンルの違いによる内容の差を明確に意識していた。伝記は、「非常に大きな業績や出来事」ではなく、「日常生活の詳細」を主たる対象とするのであって、それゆえ彼は、君主の伝記に軽々には手を出さなかった。かりに、そうした違いを越えた文筆理念としてこの諦観を措定しうるとしても、それではなぜ、『人間の願望の空しさ』に登場するカール7世への言及が、「伝」にはほとんど見られないのか、という疑問が残る。彼の失墜が、まさにフリードリヒのシェレージエン侵攻と軌を一にするものであったにもかかわらず、である。[12] そもそも既に述べたように、「伝」に記されたフリードリヒは溌剌とした若き君主なのであって、そこに「国王や皇帝の願望もまた空しい」という示唆はない。しかもそうした「伝」を基にしたフリードリヒの伝記的記述が、ドイツ的表象の比較的少ないイギリス18世紀に何度も再版されたのであって、そのことは、当時の読者が、単なる諦観とは別の要素をこの「伝」に読み取っていたことの証左と言える。そういう読者の意識に、当のジョンソンが無自覚であったとも考えにくい。人間フリードリヒに焦点を当てたジョンソンの「伝」は、『人間の願望の空しさ』に見られる彼独特の諦観とは切り離して考える必要

12 カール7世が失意の内に世を去ったのは1745年である。しかし、「伝」の内容や筆致からみて、「伝」の途絶がそのことを暗示するものであるとは考えにくい。

がある。[13]

Ⅳ. 君主の安定感と不安定なイギリス

ジョンソンの言行を詳述したジェイムズ・ボズウェルの『ジョンソン伝』には、ジョンソンのフリードリヒへの言及が数箇所にわたって記録されている。なかでも注目すべきなのは、「人間の願望の空しさ」といった諦観とは異なる極めて肯定的な立場から、彼がフリードリヒのことを語っている点であろう。例えば、「国王とは、気楽で遠慮のない社交という、あらゆる満足感の中でも最大の楽しみを奪われているから不幸だ」という意見に、ジョンソンは反論する。「偉大な国王は、皆いつも社交的さ。当代唯一の偉大な国王であるプロシア王だって、たいへん社交的だ。才能あるイングランドの国王としては最後となったチャールズ2世もそうだった。わが国のヘンリー王やエドワード王も皆社交的だった。」[14] また、1772年3月27日（実際には28日）、スコットランドの貴族サー・アレグザンダー・マクドナルドとの会話の中で、「わが国では諸大臣がその時々の政治的観点から選出されるため、適材とは言えません」と言うマクドナルドに同意して次のように答えている。「その通りです。わが国のような政府では、任に相応しい人物が選出されることなど決してありません。（中略）専制君主であれば、任に応じて適材を登用できるでしょう。プロシア王ならできますね。」[15] フリードリヒの人生に「人間の願望の空しさ」を見出す視線は、ここにはない。看取できるのは、むしろ、当時

---

[13] 一見、読者の反応を顧慮せず自らの理念に基づいて執筆活動を行ったかに見えるジョンソンが、実は同時代の読者と出版界に細心の注意を払っていたことについては、拙稿「作者、読者、出版者—サミュエル・ジョンソンの『ラセラス』再考」『十八世紀イギリス文学研究』（日本ジョンソン協会編、開拓社、2002）、270-87頁を参照。

[14] James Boswell, *The Life of Samuel Johnson, LL. D.*, ed. George Birkbeck Hill, rev. ed. L. F. Powell, (Oxford: Clarendon, 1934-50), vol. 1, p. 442 より拙訳による引用。

[15] *The Life of Samuel Johnson, LL. D.*, vol. 2, pp. 157-58 より拙訳による引用。

のイギリス国王や政府に対する痛烈な皮肉である。

当然のことながら、「伝」の中にも、フリードリヒに対する肯定的な見解は散見される。フリードリヒの天賦の才が練磨されていく過程をジョンソンは次のように記している。「プロシア国王が非凡な能力を持って生まれたことは間違いないが、彼はまた、そうした能力を尋常ならざる勤勉さを持って自ら育てたのである。それはおそらく、当時の彼が、なんと残酷で不幸なことかと考えていた境遇によるものであろう。」(439-40) 少年フリードリヒが「残酷で不幸な」境遇と考えていたのは、厳格にして芸術を好まぬ父王との有名な確執を指す。こうした逆境こそ、彼を優れた君主に育てたと、ジョンソンは続けている。

> 華美なことを慎んで時を送り、身分の低い者たちの喜びや仕事に加わることで、彼は人生の諸相に精通し、人間の純粋な気持ちや関心、欲望、苦痛といったものを知ることができた。一時的な苦境に立つことで得られるこうした力がなければ、王というものは、単にこの社会をぼんやりと霧の中で見ているようなものである。(中略) 私はかねがね思っているのだが、クロムウェルが本来の国王以上に有していた能力とは、彼が生まれ育ったごく私的な環境の中で培われたものであろう。(440)

「伝」は、君主に関してジョンソンが残した唯一の単独の伝記であるが、しかし彼は、クロムウェルやスウェーデン王カール12世を主人公とする伝記や悲劇の構想を有してはいた。折に触れて彼らへの言及が見られるのは、そうした事情による。

第1次シュレージエン戦争での劣勢を挽回したのも、少年時代に涵養されたフリードリヒの「人間性」によるものであった、とジョンソンは考える。

プロシア軍が野営地に引き返してきた時、あるオーストリアの将校が致命傷を負って運ばれてきたとの報に接し、王は彼を見舞うことにした。彼のこの優れた人間性に基づく行動に心を打たれた将校は、短い会話の後、次のように語った。「殿下、私の命はもう尽きます。殿下に拝謁するこのような名誉を得、私は次のことをお知らせすることで殿下にお礼をできれば、本当に満足できます。それは、殿下の同盟軍が今まさに裏切りを働こうとしているということです。」(458)

果たせるかな、オーストリア将校の情報は正しかった。同盟軍の裏切りを事前に察知したフリードリヒはここで一気に劣勢を挽回したのである。

もちろんジョンソンは、全面的にフリードリヒを賞賛していたわけではない。例えば1763年7月18日、フリードリヒを「英雄、音楽家、文士」として讃える政治家サー・トマス・ロビンソンに対する彼の反論を、ボズウェルが記録している。「一人の人間としては結構ですね。文士ということに関して言うと、私は彼の詩を見てはいませんが、散文はつまらぬものです。まあ、ヴォルテールの従者が書くくらいには書けるということでしょうか。」[16] 啓蒙君主としてのフリードリヒの学問についても、ジョンソンは手厳しい。「伝」に次のような記述がある。「概して王子の学問というものは、それほどの効果を上げることがない。へぼなお付きと勉強するからだ。」(439) しかしながら、「伝」の記述を中心にジョンソンのフリードリヒへの言及を総合的に勘案するならば、そこに浮かび上がるのは、「人間の願望の空しさ」を体現する君主の姿ではなく、むしろジョンソンとしては稀に見るほどの好意的な人物描写なのである。

ここで注目すべきことは、このような評価が、「ごく私的な環境」といった「日常生活の詳細」を含みつつも、本質的にはジョンソン自身の国

16 *The Life of Samuel Johnson, LL. D.*, vol. 1, p. 434 より拙訳による引用。

家論や君主観と結びついている、という点であろう。実際「伝」には、ジョンソンの通常の伝記とは異なり、勅命や条約、フリードリヒ法典などを中心に、統治機構そのものに対する考察が少なくない。例えば、フリードリヒのシュレージエン領有をジョンソンは次のように説明している。

> 領土の拡張を誇る君主は多いが、その広大な領土に幸福と安寧をもたらす者は少ない。プロシア王はその両方の栄光を求め、征服者としてのみならず、法治者としての賞賛を加えようと努めた。財産の保有を認め、誤報を制し、民事や刑事における正義を実施することは、非常に難しいが大変有益なことであるので（中略）彼の平和的な治世について多少詳しく説明したい。プロシア王が、他の君主とは違い、法の性質と論理に精通していたことは、法の制定及び廃止に関する彼の論拠によく示されている。(449-50)

そもそも、ジョンソンが「伝」の執筆に用いたと推測されるのは、既に述べた通り、当時の定期刊行物に掲載された断片的な資料の寄せ集めを中心としたものであり、そこから「日常生活の詳細」を描くには、当然、限界があった。実際、当時のジョンソンはドーヴァー海峡を越えたことすらなかったのである。それにもかかわらず彼が、君主に関する唯一の、しかも比較的まとまった長さの伝記を執筆し、例外的とも思われる好意的な描写をしているのは、そこに別の要素、すなわちイギリスの現体制を批判的に比較考察するための具体的な対象を、フリードリヒの治世に見出していたと考えるのが自然であろう。ボズウェルの記録に見られる、英独の君主を比較した彼の言葉も、なお不安定要因を抱えたイギリスの君主とは異なるフリードリヒの安定感に対する一定の評価を感じさせるものである。[17] この意味においてジョンソンの「伝」は、「日常生活の詳細」を描出するとした伝記に対する自らの定義を越え、しかも自ら住まうイギリスという国家の枠をも越えてこれを客観視しようとする視点を

作者にもたらす可能性を秘めていた、と考えられるのである。

V．書かれなかった続編

だが結局、ジョンソンは、「伝」を途絶させることで、その枠を越えることはなかった。クロムウェルやスウェーデン王カール12世に関する作品構想についても、それが現実化することはなかったのである。それはなぜか。

後にジョンソンは、1770年代前半に発表した政治論をまとめて76年に刊行しているが、この論集のモットーに、ローマの詩人クラウディアヌスの次のような一節を選んでいる。「君主への服従を奴隷制と考える者は間違っている／敬虔な君主のもと以上に幸福な自由は存在しない」。[18] ジョンソンは生涯にわたって、君主制支持論者であった。もちろんそれは、個々の国王の優秀さや特定の王家への敬愛をことさら強調するという意味においてではなく、安定した社会秩序の根幹への意識であり、「君主の力と義務に基礎を置く揺るぎなき政体の秩序」を志向することによるものであった。[19] だから彼は、例えば、「イギリスの政体においては、王権に対する均衡を維持すべく、これに対抗しうる一般の人々の精神を引き

---

17 ジョージ1世および2世がイギリスの君主であるにも関わらずハノーヴァー家寄りで信頼できないとする主張は、18世紀前半の国王批判や「外国人嫌い」の言説にしばしば登場する。本稿の冒頭で触れた『ガリヴァー旅行記』に見られるジョージ1世像もその一例であり、またジョンソンも初期の詩『ロンドン』において痛烈な一節を記している。「(高貴なるブリトン人は汚辱にまみれたロンドンを離れて閑居するので) ひそやかな住処を与えたまえ／――をこそロンドンで生きさせよ、――はロンドンで処世術を身に付けたのだから。」(49-50行。「――」は「ジョージ」(2世) の伏せ字である。) "London," *Poems*, Yale Edition 6, pp. 45-61 を参照。

18 *Political Tracts, by the Author of the Rambler* (London, 1776) のタイトル・ページより拙訳による引用。

19 Pat Rogers, *The Samuel Johnson Encyclopedia* (Westport, CT: Greenwood, 1996), p. 300 より拙訳による引用。

立てなければならない」といった、王権と民衆との対立を前提とした見解を一笑に付すのである。

> なぜ王権にそんな子供じみた嫉妬をするのか。王だって大した力を持ってはいない。私が、どのような統治形態も似たようなものだ、と言う時、それは、どんな統治も権力を長くは乱用できない、ということを言っているのだ。人間はそんなものに長くは耐えられない。もし君主が国民をひどく押さえつけたりすれば、国民は必ずや立ち上がって彼の首を刎ねるだろう。これが、人間に本来備わった、専制に対する抑えというものであり、だから我々は、どんな統治形態の下でも安心していられるのだ。（中略）プロシア王の国民だってそうだ。[20]

人々の自由な気風と君主制とは、ジョンソンにあっては少しも齟齬をきたさないのである。

それゆえ、彼にとってのフリードリヒは、イギリスの具体的現実的政治問題とは別に、親近感を覚える存在であったはずだ。だから彼は、拝謁したこともないフリードリヒを「当代唯一の偉大な国王」と考え、「伝」の筆を執った。そして彼自身、従来手がけた伝記の枠をも越えるような、人物と歴史と政治の議論に、フリードリヒという君主を通して立ち入りかけたのである。彼のこうした関心の内に、「人間の願望の空しさ」というような諦観はもちろんない。だが、それにも関わらず、結局筆を折ったのは、一見魅力的に思えるフリードリヒの治世に、諦観とは異なるある種の違和感をも感じ取ったからであり、そこにイギリスの現実政治が絡め取られることを危惧してのことだったのではあるまいか。[21]

ジョンソンは、実は「伝」の4年後、『ブリティッシュ・マガジーン』

---

20 *The Life of Samuel Johnson, LL. D.*, vol. 2, p. 170 より拙訳による引用。

誌に「イギリス民兵の勇気」という一文を寄せ、その中で次のように述べている。

> 規則は、やがて、合図や命令に対する機械的な服従を生み出す。（中略）また、訓練によって兵士の心には畏怖の念が生まれ、罰せられることを何よりも恐れて、将軍の知恵と運を妄信し極めて危険な戦いにも従うようになる。この訓練と規則によって仕上げられたものこそ、ロシアの女帝やプロシアの君主の軍隊に見られるものだ。だが、わがイギリスの軍隊には、こうしたことは全く見られない。[22]

「生まれながらにして所属上長というものを持たない」イギリス人の強烈

---

21 イギリス18世紀の文学作品におけるドイツ的表象が少ないにもかかわらず、幾つかのドイツ的要素はジョンソンの身近に存在しており、その近さが、彼の現実的な危惧につながった可能性がある。例えば、『ジョンソン伝』を記したボズウェルは、1764年、大陸旅行の際ベルリンに立ち寄り、そこでフリードリヒに面会を申し込んでいる。有名人に面会することを好んでいささか軽率な行動が少なくなかった彼の、フリードリヒに対する面会申込書を拒絶したのは、実はイギリス政府の外交官としてフリードリヒの下で活躍していたサー・アンドリュー・ミッチェルである。ミッチェルはボズウェルと同じスコットランド出身であったが、ボズウェルのスコットランド人気質がプロイセンとイギリスの関係に支障を来たしかねないと憂慮しての判断であった。プロイセンの宮廷で一定の外交成果を挙げたミッチェルと面会を拒絶されたボズウェルという二人のスコットランド人のベルリンにおける微妙な接触は、プロイセンとイギリス、そしてロンドン政府とジャコバイト騒動後のスコットランドという二つの政治問題を象徴的に示すものであり、今後更に調査を進めて行きたい。James Boswell, *Boswell on the Grand Tour: Germany and Switzerland 1764*, ed. Frederick A. Pottle (London: Heinemann, 1953), Patrick Francis Doran, *Andrew Mitchell and Anglo-Prussian Diplomatic Relations during the Seven Years War* (New York: Garland, 1986)、Peter Martin, *A Life of James Boswell* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1999) などを参照。

22 "The Bravery of the English Common Soldiers," *Political Writings*, ed. Donald J. Greene, Yale Edition10 (New Haven: Yale UP, 1977), p. 282 より拙訳による引用。

な個人への意識こそ、戦時における彼らの勇気の源泉である、というのがジョンソンの主張である。ここには、強靭な軍隊を育てた君主の力を認めつつも、それとは異なるイギリスの国民性を強く支持する彼の声がある。1756年段階で、フリードリヒの治世の現況と将来に、このような違和感を既に彼が看取していたとすれば、ジョンソンがそこに立ち入るのを敢えて避けることで判断を保留し、その前段階、すなわち第1次シュレージエン侵攻の成功をもって「伝」を途絶したという説明は自然である。そしてその保留は、アメリカの独立やフランス革命を目にすることなくこの世を去ったジョンソンの生涯続くこととなったのである。

ジョンソンの死から半世紀以上を経た1856年、イギリスの歴史家トマス・カーライルは6巻本の大作『フリードリッヒ大王伝』の刊行を始めた。その後長く、フリードリッヒの英雄像を決定づけた伝記である。フリードリヒを英雄視し、英雄崇拝によって大衆民主主義の弊を正すとしたこの19世紀の歴史家が、ジョンソンを18世紀文壇の「英雄」と位置づけたのは、まさに歴史の皮肉であった。当のジョンソンは、君主のあり方と国民性の調和を探っていささか逡巡し、フリードリヒの治世の具体的な状況についても、そしてまた、広く君主制と民主主義の功罪についても深入りすることはなかったからである。彼が敢えて判断を保留したこの問題は、結局、適切な形で回収されることなく、実は今日まで放擲されているようにも思われる。